

令和5年度岐阜県青少年美術展青年部の選定評

絵 画	<p>コロナの規制緩和により出品作品が増え、活気が戻りつつあることを感じる。アイデア、発想の面白さや個性を前面に押し出した作品が目をつけたものの、時間をかけて描き込んだ作品が最終的には残った。描写力の差が出てしまう感はどうしてもあるが、それを越えたものが光る作品も多く見られ、今後が楽しみである。</p>
デザイン	<p>作品のレベルが良い意味で平均化してきている。どの作品も明度、彩度ともに高くトロピカルな色使いが多いのは、感染症の蔓延に伴う自粛から解き放たれた反動によるものかもしれない。ただ、個々の表現があふれる一方で、デザイン本来の目的が薄まっている印象を受ける。目的に応じたモチーフや構図、配色を心がけることで、より良い作品を生み出すことができるのではないだろうか。</p>
立体造形	<p>昨年に比べ応募点数が増え、質も上がっている。素材や表現方法もバリエーションに富んでおり、見ていて楽しく、高校生ならではのエネルギーも感じた。ただ、表現の完成度は上がっているが、作品のコンセプトや、かたちの必然性などがまだまだ希薄であると感じた。「こうしたい」を強くもち、次の制作に励んでほしい。</p>
書 道	<p>漢字の多字数の応募が多く、その中に秀作が目立った。仮名は大文字創作、細字の臨書共にやや少なくなった。漢字仮名交じりもやや少なかった。篆刻は例年よりも多数の応募があったことは嬉しい限りである。上位に入賞した作品は、練習量の多さが作品に滲み出ているものばかりで、書に向かう熱量が結果につながったようである。</p>
写 真	<p>昨年度より応募総数が70点増加した。内容も多種多彩であったが、学校によって差があった。上位に入賞した作品は、自分の想いをわかりやすく伝えることができていた。写真としては良いが、題名が伝わりづらい作品もあった。伝えたい価値があるかどうかを考えながら撮影してほしい。</p>